

筑紫（九州）の萬葉集と風景画シリーズ（第三十六回）

「筑紫の地で故郷を想う歌」

だざいのそち
大宰帥（長官） 大伴旅人

大伴旅人は神亀四年（727）末か翌年春頃、「①九州と壱岐・対馬・種子

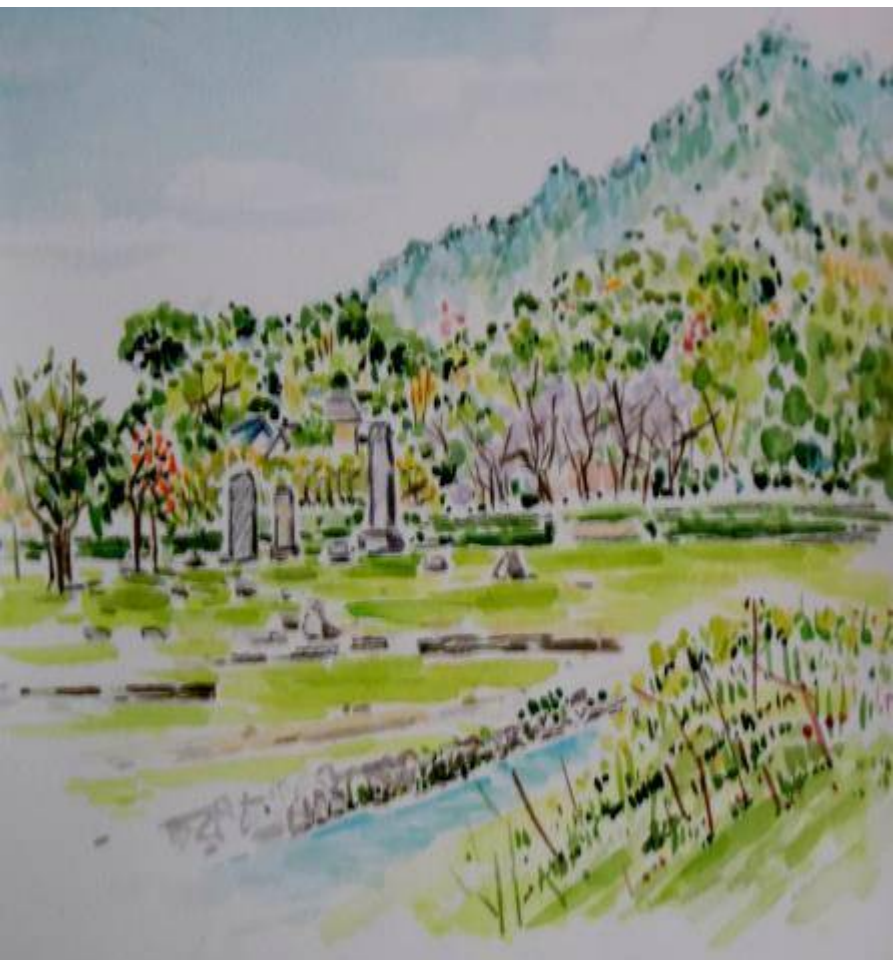
島（九国三島）を治める」②外国に対して国を守る辺境防備「外交を司

つかさど

る」という役割を持つ大宰府の帥（長官）として赴任したが間もなく妻を

失い、また都（平城京）より遥かに離れた筑紫国（今の福岡県）にある大

宰府が在官地であることから望郷の念しきりであったようである。



（写生地）大伴旅人が大宰帥として在官した大宰府政庁跡と北方（背景）に万葉集に

詠われる大野山（現・四王寺山）を描く。（池田杏花）

・大伴旅人は大宰府に在官のころ次の望郷（大和）の歌をうたっている。

1) 我が盛わさかり 　またをちめやも 　ほとほ

とに 奈良の都を 見ずかなりな

卷三―331 作者 大伴旅人

(解説) 若い時代がまた返ってくるだろうか、いやそんなことは考えられぬ。もしかしたら、奈良の都を見ないままに終わってしまうのではなからうか。



(写生地) 奈良市二条大路に残る古代奈良の都・平城京跡と背景に奈良のシンボル新

年の山焼きで有名な若草山(御笠山ともいう。≪高さ342m)を描く(杏花)

2) 忘れ草 我が紐ひもに付く 香具山の

古ふりにし里を 忘れむがため

卷三—334

作者 大伴旅人

(解説) わすれ草を私の衣の下紐に付けました。香具山の聳そびえるふるさと
明日香をいっそのこと忘れようと思つて。

* 「忘れ草」は新日本古典文学大系には漢語—萱草(かんぞう)。夏から秋
にかけて黄赤色の花をつけるユリ科の多年草。中国では憂うれいを忘れさせる
草として詩文に描かれていると記されている。



(写生地) 奈良県明日香村にあり古代の大和全景が望める「甘櫛の丘」あまかしから北側に聳える大和三山の一つ「天香具山(奈良県橿原市)」風景を描く。(杏花)

・前記2首(巻三―331、334)は大宰府での宴席での歌で部下で大宰府の防人司の次官であった大伴四綱から帥大伴旅人に歌いかけられた次の歌に応えた歌といわれる。

ふじなみ

・藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良
の都を 思ほすや君

巻三―330 作者…大伴四綱

(解説) ここでは藤の花が満開になりました。奈良の都を懐かしんでいらつしやいますか、あなたも。

(主な参考文献)

・新潮日本古典集成「万葉集二」